志向性

――現在状況と歴史的背景(*)――（一）

中畑正志

1　このような表題を掲げたが、志向性の概念の歴史といっても、それほど遡ることはできないかもしれない。その生誕は一般に一八七四年であると考えられているので、哲学の概念としてはまだ新参者といってよいだろう。

もちろんこの概念にもそれなりの来歴はあり、そしてその出生と成長にまつわる思想的事情を解きほぐすことがこの考察のねらいの一つでもある。しかし志向性の概念は、その生い立ちがどうであれ、すでにりっぱに独り立ちしているようにみえる。じっさい現代の哲学においては、いわゆる分析哲学の分野でもまた現象学やその他の「大陸の哲学」においても、それぞれの仕方で重要な（少なくとも問題的な）概念としての地位を占めるに到っている。――「現代の心の哲学における最もアクティブな研究領域の一つは志向性にかかわるものである」(Shoemaker 1994, p. 56)、「なぜ自然科学の方法が、個人の、あるいは集団的な人間の行動の研究に適用されるとき、物理学や化学に匹敵しうるような結果をうみださなかったのか、……という疑問に対する正しい答えの方向は、行為の構造における「志向性」の役割を理解することのうちにあると信じる」(Searle 1983, p. x)、（あるいは少し飛躍して）「志向性とは自由の成就にほかならない」(Lévinas 1949, p. 40) ……。

このような概念が、この論考の主題である。

2　とはいえ「志向性」というタームが、われわれの日常生活で使われることはない。それは、ほぼ哲学の領域での

み流通する、いわば「業界用語」である。だから、この領域の専門家にはわかりきったことだろうが、最初にこの概念について、現在ほぼ共通に了解されていると思われる事柄を確認しておく。

基本的意味　心の状態のもつ、〈何かにかかわる〉(aboutness)、あるいは〈何かに向けられている〉(directedness)という特徴。これは物理的なものには見られない特徴であり、心的なものと物理的なものとを区別する指標となる(「意図的」(intentional)という意味とは区別されなければならない)。

歴史的経緯　中世スコラ哲学でもちいられた intentio というタームに由来し、とりわけイスラム哲学の用語の翻訳語としてのこのタームの機能を重要な起源としている。フランツ・ブレンターノがこのスコラ的概念を復活し、現代哲学における志向性概念の流通の先鞭を付けた。彼はこの概念によって心的なものの関係性や方向性を強調し、この概念を心的なものとそうでないものとを識別する指標とした。

いくつかの哲学事典など[1]から抽出される「基本的意味」とその「歴史的背景」は、およそこのようなものである。英米圏の哲学での理解に少し傾斜したまとめ方ではあるが、この論考の目的はすべての立場に公平な事典的規定を与えることではない。主として英語圏の哲学での「志向性」をめぐる平明な議論を観察しながら、この概念の孕む問題性と意義を再考することである。

「基本的意味」について少し解説を付け加えよう。われわれの心的状態は、何らかの状態や対象に関係している、あるいは何かに向けられていると考えられる。たとえば「私はいま水が飲みたい」と欲するとき、私の欲求は眼前の水に向けられている。また「司会者は私の講演が長いと思う」と思うとき、司会者の信念はこの私の講演が長いという事柄または事態にかかわっている。このように欲求や信念は、つねに何かにかかわったり何かに向けられているものであり、たんに欲求したり信じているだけで何かを欲求したり信じてはいない、ということは意味をなさない。「何かにかかわる」というこの特性は、さらに、疑う、望む、想像する、思い出す、悔いるなどの心的事象に一般的に見られるもので

ある。これに対して、いま私の前にある机も水も、そのような意味で「何かにかかわる」わけではない。一般に、物理的対象と呼ばれるものは、「何かにかかわる」ということを成立の条件とはしていないように思われる。

かくして、志向性は心的なもののみがもつ特徴である、というテーゼが提示されるにいたる。

3　いま素描されたような志向性の概念をめぐって、これまでさまざまな問題が論じられてきた。だが、なかでも最も重要と考えられている課題は、「自然的世界のなかで志向性はいかにして成立するのか」という問いに集約されるだろう。[2] その事情は、次のように要約できる。

現代のわれわれは、きわめて緩やかな意味においてであるが、自然主義的な（naturalistic）世界観を暗黙のうちに採用している。つまりわれわれが住まう世界は、物理学や生物学などの自然科学によって理解可能な存在から構成されており、超自然的なものは存在しない。心などもそのような自然的世界の一部である。しかし志向性は、自然的世界の性質や事物の関係とは明らかに異なるように思われる。「何かに向けられている」「何かにかかわる」という志向的性質は、心的状態には本質的な要件に思われるが、心的でない事象にとってはそうではない。すると、もし心的状態も自然的世界の一部を構成し自然的な秩序や法則に従うものであるならば、心的状態の指標ともなりうる志向性について、自然的な（naturalistic）タームによる説明、志向的概念を前提としない自然科学的説明が与えられなければならない……。[3]

志向性という概念が以上のような課題を提起するのであれば、志向性とは自然主義者にとっては自然主義的に説明されるべき挑戦であり、また非自然主義者（心的状態を自然主義的に説明することはできないと考える人々）にとっては自然主義の侵攻をくい止める防塁である。このように、志向性の概念は、しばしば自然主義と非自然主義との雌雄を決する戦場のひとつと考えられるのである。

I　問題の図柄の定着

4　ブレンターノに由来する志向性の概念が大陸系の哲学に広く受容されているのは、ある意味では当然である。彼の弟子のフッサールらによって継承されることを通じて、この概念は最大限の意義を与えられ[4]、そしてこのフッサールの議論に多くの哲学者が学んでいるからである。他方で、もともとオーストリア生まれのこの概念を、先に見たような自然主義を基調とする英語圏の哲学に導入し、自然主義にとってひとつの挑戦と考えられるほどに重要な概念へと成長させた功績は、まずだれよりもチザム（Roderick M. Chisholm）に帰せられるだろう。

英米の哲学へのブレンターノの重要な紹介者でもあるチザムは、志向的な文（intentional sentence）であることの諸基準を挙げることによって志向性の概念をより明確に規定するとともに、その理論的な可能性を顕在化させることにつとめた。そのうちの最も有名な議論が、「志向的内在」をめぐる議論（Chisholm 1957, chap. 11）である。英米圏でのその後の議論は、このチザムの分析を出発点としているといってよい。歴史的遡源のためには、まずこの一里塚に立ち止まって、どのようなことが論じられていたのかを確認する必要がある。

5　チザムはここで志向性の概念を、われわれの言語表現の形式へと変換して分析し、文が志向的であることの標識として次の三つを挙げている。その基準は、少し回りくどい仕方で述べられているものの、単純化すれば、文Sが志向的である条件は、次の三つの基準のいずれか（その選言）を満たすことである。

(i)　Sは、単称名辞（singular term）を含むが、その指示対象の存在することを含意しない。

(ii)　Sは、Sの真理値とかかわりのない文を含んでいる。

(iii)　Sの含む名辞や記述を、真理値を保持したまま、それと同一の指示対象を持つ他の名辞や記述と代替することができない。

もちろんこの基準によって志向性が十分に定義されるかどうかについては、その後の議論では、むしろ疑問の声の方が大きかった。しかし少なくとも(i)と(iii)は、志向的な文のもつ特異性として挙げられるのが通例である。

一般にAとBとの間に何らかの関係が成立するとき、AとBとがともに存在することが帰結する。しかし私がシャーロック・ホームズに会いたいと望むとき、私の希望は架空の対象とかかわっている。(i)が示すのは、このように存在しないものとの間にも関係が成立するという特異性である。この特異性は、少しテクニカルに言えば、志向的文脈における存在汎化（existential generalization）の不成立として理解されている。また伝統的には、心的状態のかかわる対象――「志向的対象」（intentional object）と呼ばれる――の存在論的身分について問題を提起してきた。(ii)も、成立していない（真でない）事態についての思考や欲求が成立する（そうした心的状態が成立することは真）という事象の記述を含むものであるから、非実在的な事象への関係という点では(i)と親近的である。

他方(iii)は、志向的関係の成立の有無が、その関係する項の記述の仕方に依存するという特異性を示す。たとえば、私は現在の京大文学部一の酒飲みの教授がハンサムだと信ずることなく、伊藤邦武さんがハンサムだと信じることができる。しかし京大文学部一酒飲みの教授は伊藤さんなので、私の信念は同一人物にかかわっているが、その記述の仕方に応じて、私の信念は成立したりしなかったりすることになる。このような特異性は、いわゆるライプニッツの法則「Fa かつ a=b ならば Fb」の志向的文脈における不成立、あるいはいわゆる指示の不透明性として理解される。

この(i)及び(ii)と(iii)の関係は、しかし、それほど明確ではない。チザム自身あるときは(i)(ii)は(iii)に吸収されると考えたが（Chisholm 1955/56）、ほどなくそのような期待を捨てている（Chisholm 1957）。直観的に言えば、志向性あるいは志向的な関係の特質を、(i)(ii)は実在しない事象との関係が成立するという点に、(iii)は実在する事象と関係しつつその関係が当の事象の記述や理解の仕方に依存して成立するという点に認めるという相違がある。この事情は、ここで規定されている「志向性」の概念がじつはすでに一枚岩ではなく、内部に複数の思考を胚胎している可能性を示唆するか

もしれない。（そしてこの可能性は、本論考の続編において、歴史的遡源を通じて実証されるであろう。）

6　だがともかく、文が志向的であることの以上のような基準に基づいて、ブレンターノの志向的内在の理解をチザムは次のように再定式化している。――単に「物理的なもの」に関するわれわれの信念はすべて非志向的な文によって表現できる。しかし、知る、欲するなどの心的態度を記述しようとするときには、志向的な文あるいは非心理的な現象を記述する際には用いる必要のなかったタームを使用しなければならない。

心的現象にのみ志向性が認められるというこの見解は「ブレンターノのテーゼ」として広く知られることになる。その結果、ブレンターノの著作をまったく読まずに、このチザムの分析（とそれに続く議論）だけに依拠して「ブレンターノのテーゼ」の妥当性を論じるという事態、「自己超越」や「地平」といった概念群に紛れていないだけ風通しはいいがいささか軽薄とも言える事態が現出した。[5]

7　チザム自身は、いま手に入れた定式化を武器に、志向的性質を物理的状態に還元しようとする議論を批判し、「ブレンターノのテーゼ」を擁護する。具体的には、指示する（refer）、表示する（designate）、意味表示する（signify）などの意味論的タームの志向性はそれを使用する人の心の志向性から与えられた派生的なものであるという想定[6]のもとで、そのような言語の志向性を刺激や反応などの物理的タームによる記述に置き換えることはできないことを論証するのである。

その擁護の特質は、たとえばカルナップに対する批判によくみてとれるであろう。カルナップは、「すべての心理学のセンテンスは、物理的な事象、すなわち人間や他の動物の物理的な振る舞いを記述するのである」（Carnap 1959, p. 165）という行動主義的立場を採る。以下、カルナップの提案とチザムの批判を非形式化と単純化をほどこして述べるなら次のようになるだろう。

カルナップの提案は、ある語「Q」の意味を、その語が意味する対象が現前したときに「Qか？」と問われた場合に

肯定的答えを与えるというその語の話者の反応によって規定しようとするものである。たとえば私が‘dog’という語の意味を理解しているならば、犬が目の前にいるとき「dog か?」という問いに対して肯定的な答えを与えるだろう。したがって私にとっての‘dog’の意味とは、「dog か?」という問いに対して肯定的な答えを与えるためにその対象が満たしているべき条件、つまりそれが犬であること、あるいは大昔から人間に飼育されてきた嗅覚の鋭い中型の哺乳類であること……などである。このようにして問いに対する私の反応から意味を定義するとき、私にとっての‘dog’が意味するものが犬であるといえるのは、わたしが「dog か?」という問いに対して肯定的な答えを与えるのが、現前する対象が犬であるという場合でありかつそのような場合にかぎられるからである。

しかし残念なことに、実際には思い違いということがある。そしてこのことに、チザムの批判は依拠する。たとえば狐が目の前にいながら私はそれを犬と思っていたために、「dog か?」と聞かれてイエスと答えたとしよう。カルナップ流の意味の規定にしたがうならば、狐もわたしにとっての‘dog’の意味を満たすもののメンバーに含まれることになる。しかし私の理解している‘dog’の意味には狐は含まれていないのだ。もしこの困難を避けて、‘dog’の意味を、「私が犬であると信じている対象が現前するときに肯定的答えを与える」などと変更するならば、「信ずる」という心的・志向的概念を密輸入することになり、心的でないタームによって意味を規定しようとする試みは破綻してしまう。

批判の要点は次のようになる。ある話者Ｘにとってある言葉Ｑが何かｙを意味したり指示したりするということを、ある対象の現前とその言葉の発話ないしはその言葉を用いた疑問文に対するＸの肯定的態度などの外的反応から規定しようとしても、ＸがＱの意味をｙを指すものとして理解しつつもｙ以外の対象をｙと誤認しＱを誤って適用するということがある以上、ＸにとってのＱの意味を対象の現前とそれに対する反応の記述からだけは確定できない。したがって、話者が言葉を適用するその対象をどのようなものとして理解しているのか、ということを示す心的あるいは志向的諸概念へと言及せざるをえないのだ。

8　いまチザムの批判を少し詳しく紹介したのも、一つには、その論点が、荒削りではあれ、意味や心を自然主義的（行動主義的あるいは自然科学的）に説明することに対する批判の一つの原型を提示しているからである。事実、たとえば意味の理論の可能性とあり方という基本的問題をめぐってダメットを批判するマクダウェルの論点は、このチザムの議論と同質である。(7)

そしてさらに、チザムの議論は、先に述べた「基本的意味」などでは必ずしも明瞭でなかった志向性の注目すべき局面を照らし出している。チザムの問題提起を別の角度から見るならば、その議論の中心的部分には「誤る」ということの問題性が見いだされるだろう。刺激とその反応の観察のみに依拠して言葉の意味を確定できないのは、その言語の使用者がある対象を見誤るなど、何かを誤った仕方で表象したり理解したりすることに起因する。したがって自然化の可能性をはじめとして志向性を論ずる者は、因果性と規範性（広義）との関係づけという問題を、すなわち「因果的世界において真／偽、正／誤の弁別はどのように成立するのか」という問いを引き受けなければならない。物理的な因果的過程という関係それだけを見るかぎり、二つの事象間には因果関係の成立あるいは不成立という事態しかなく「誤り」が成立する余地はない。しかし志向的関係においては、心的状態が何かにかかわりながら、それを正しく表象することも誤って表象することも成立するのである。(8)

9　では、志向的タームにはこのように物理的状態や過程に還元されえない特異性があるとすれば、その特異性はいかなる意義をもつのか。――実はチザムの議論を受けとめた人々の間でも、この点について学ばれる教訓は、論者によって百八十度異なる。

チザムの議論からチザムとはまったく別の教訓を引き出したのはクワインである。クワインは、この点にかぎってはカルナップと同様に、基本的には物理主義的な存在論を採る。すなわち、世界に実在するものとしては、心的・志向的な事象を認めない。他方で、彼は――「根元的翻訳」(radical translation) についての考察などを経て――意味論的な

用語を自然科学の言語に厳密に翻訳することの不可能性を積極的に論証し、この点についてはチザムと見解を同じくする。では、彼は志向的な概念をどのように扱うのか。――クワインは志向的対象を措定しようとする誘惑を払いのけたのち、次のように発言している。

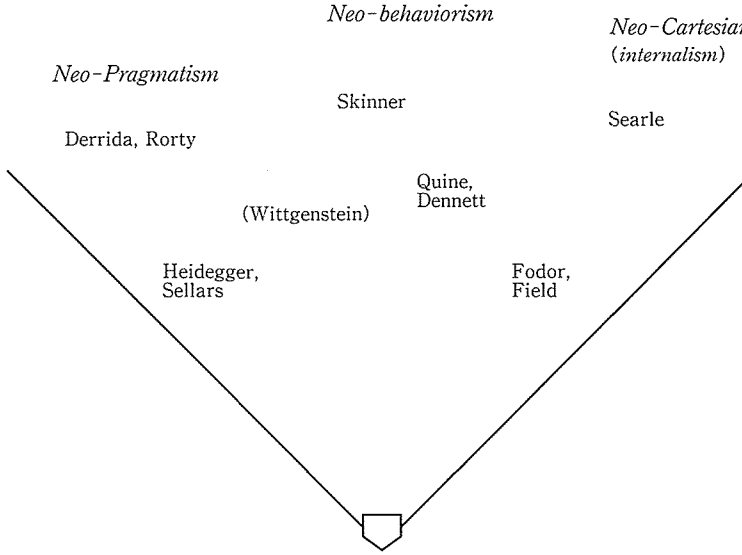
志向的なイディオムは還元できないというブレンターノのテーゼは、翻訳の不確定性のテーゼと一致している。人はブレンターノのテーゼを、志向的イディオムが不可欠であること、そして志向性についての自律した科学が重要であることを示すものとして受け入れることもできるが、あるいは、志向的イディオムが根拠をもたないこと、そして志向性の科学が空しいものであることを示すものとして受けとることもできる。私の立場は、ブレンターノとは異なり、第二の立場である。……ただし私は志向的イディオムの日常的な使用を否定するわけでもないし、それらが実際的に（practically）なしで済ますことができると主張するわけでもない。……もし現実の真なる究極の構造を記述しようとするのであれば、採用すべき正規の枠組みは、直接引用以外の引用はなく、命題的態度もなく、ただ有機体の物理的構成と振舞いしかもっていない厳格な枠組みである。（Quine 1960, p. 221）

クワインにとっての志向的イディオムの意義は、あくまでプラグマティックなものにとどまる。われわれが日常生活を送る上でそれは実際的に必要なのであるがそれ以上の意義をみとめることはできない。彼にとって志向的イディオムは現実の世界のあり方を描くものではない。それは「物語的イディオム」なのであり、額面通りに受け取ってはならないのである。

10　俯瞰的に歴史をふりかえるとき、チザムの定式化と分析、そしてそれに対するクワインの反応によって、英語圏での志向性についての問題領域が構成されたと見ることができる。そしてそのようなフィールドのなかで、さまざまな反応が生まれた。現在の多くの理論は、志向性を、実在のもつある性質と考える立場とそれを有用な物語を語るための概念とみる立場という二つを理論的極としながら、先に見たように、志向性を自然的世界へと軟着陸させることを試み

ていると言えるだろう。[9]

現代のさまざまな受け止め方の一端を楽しく知るには、ホージランドの「志向性オールスター軍団」のメンバーを見ればよい(Haugeland 1990)。彼にしたがってそのメンバーをダイヤモンドに配置して示せば、上のような図になる(ただし、あまり生まじめに受けとらないように)。志向性はこのように、内的に実在するものと考える(右翼的?)立場から、たんなる語り方の問題であり、もはや超越論的実体化や王侯たちの聖なる権利などとともに社会史のカリキュラムへと移ってゆくべきものと見る(左翼的?)立場までを含んだフィールドでプレイされている。



II　議論の前提

11　だが、野球はフィールドのなかだけで成立するわけではない。ファール・グラウンドも必要である。それはフィールドを戦いの場として限定している空間であり、フィールドでのプレイもその存在を前提としている。同様に、以上に素描された志向性の問題状況も、議論の直接の主題とはならないさまざまな前提的事項を共有している。とりわけそうした前提のいくつかは心的なものと志向性との重なりというかなり根幹的な事柄にかかわる。

まず第一に、志向性をめぐるフィールドの外には志向性をもたないとされる心的なものが存在する。近年の多くの論者の考えでは、志向性は心的なものの必要条件ではないのだ。しかもこの点は、志向性の分析に先立つ前提的な断り書きとして言及されるのが通例である。[10]

たとえば、何かについて不安だったり自信があったりすることなく、単に不安だったり自信があったりすることがあるように思われる。このようないわば漠然とした不安や自信は、特定の対象や内容にかかわるものではない以上、志向的ではないと考えられる。さらに、痛みの感覚のように、特定の対象をもたないと思われる心的状態がある。痛みとは何かを痛むことではなく、まさに痛みの感覚そのものであり、したがって非志向的とされる。

この考え方を少し押し進めれば、心的なものという概念の統一性への疑問へとたどりつく。近代の認識論に批判的なリチャード・ローティーは次のような不満を漏らしている。――痛みと信念を一緒につなぎ止めようとする試みは、その場しのぎなものに見える。それらはわれわれがそれを「物理的（physical）」と呼ぶことを拒否するという点をのぞけば、何か共通なものを持っているようには見えない。ローティーはさらに、「心的」という概念を現象的と志向的という二つの項の選言からなるという提案をした上で、心的なものとは家族的類似によってひとまとまりにされているにすぎないことを指摘している（Rorty 1979. p. 22）。またキャスリン・ウィルクスも「痛みと、数学についての思考とを束ねる何かが、ある適切な自然種を指し示す信頼できる指標となるということはありそうもない」と考える（Wilkes 1988. p. 38）。

このように、志向性への着目は、心という概念の統一性を堀崩す可能性を孕んでいる。これはいささか皮肉な事情と言わねばならない。志向性は、心的なものが心的なものであるかぎりでもつ特性であり、心的なものの統一性の指標として重要視されてきたからである。われわれはのちに、このような事態が、志向性という概念にもともと内在していたある種の理論的錯綜を遠因とすることを見届けるであろう。

12　同じく志向性の議論のフィールドからは、多くの場合、暗黙のうちに除外的な扱いを受けている論点がもう一つある。言語の志向性の扱い方である。

志向性の基本的意味である〈何かに向けられている〉〈何かにかかわる〉という特質は、どのようなかたちで規定されるにせよ、おそらく言語活動、とりわけその「意味する」「指示する」「表示する」といったはたらきについても妥当するであろう。語「りんご」はリンゴを指示し、「いま雨が降っている」という文は、現在の天候に向けられている。さらに言語は、存在しないアイテムや成立していない事態にかかわることもある。

しかしこの点についても、実際には、いわば実質的な議論にはいる前の予備的手続きとして、次のような処理がおこなわれる――言語の志向性は心の志向性に依存するのである、と。英語圏の哲学において志向性概念を表舞台へと引き上げたチザムの議論自体が、すでにそのような手続きのもとに遂行されていた（本稿7節参照）。彼は次のように述べている。

もしわれわれが、語や文を雑音や印のクラスとして考えるならば、われわれは語や文が「物理的」（非心理的）現象であると述べているといえるだろう。しかしわれわれは、語や文の意味がそれを用いる人々の心的な態度との関係を抜きにして語や文が持っている特性だと考えてはならない。なぜなら、シュリックがかつて述べたように、「意味はそこで発見されるかもしれないようなものとして文に内属しているわけではない」、意味は「文に『付与されなければならない』」のである。（Chisholm 1957. p. 174）

なるほどこのことは、自明であるように思われる。あなたがいま読んでいるこの文字、というより白紙上のこの黒いシミが何かを意味しうるのは、私が何らかの意味や内容を「込めて」記し、あなたがそれを「読みとる」という、互いの心のはたらきに、つまり心の志向性に依存する。心のはたらきを離れては、たんに白紙を汚している黒いシミにすぎない。これに対して黒いシミに意味を与える心のもつ志向性はさらに別の何かから付与されたものではなく、原初的な

志向性であると考えられるだろう。「文の表象能力は、内在的なものではなくむしろ心の志向性から派生したものである。他方で心的状態の志向性はさらに先立つ志向性の形式から派生するものではなく、その状態そのものに内在的なものである」というサールの理解（Searle 1983, p. vii）はきわめて自然であるように思われる。言語の志向性が心の志向性に由来するという見方は、暗黙に想定されているか、議論に必要な前提としてたんに言明されているだけのことが多いのもこのためである。

ただし、この手続きの意味するところは準備的作業として扱えるほど軽くはない。たとえばチザムにとって、言語の志向性は心理的なものの志向性に依存するという想定は一貫して維持されるだけでなく、むしろのちになってこの主張の理論的な展開・擁護が試みられることになる。[11] またサールの志向性の分析の背後には、「言語哲学は心の哲学の一分野にすぎないという基本的想定」（Searle 1980, p. vii）がある。そのような構想自体は、自明とはいえないだろう。

もとより、志向性を論ずるひとびとがそろって心の志向性の原初性という前提を受け入れているわけではない。耳を澄ますならば、そのような見解に対する異論も聞こえてくる。[12] そもそも、チザムによる志向性概念の分析とほぼ同時期に、志向性と言語との関係について、むしろ言語の志向性の第一次性の主張ともいいうる見解がチザムに対抗するかたちですでに提出されていた。ただし志向性を論ずる上で、この経緯は顧みられることは少ない。[13]

13　心と物体、心的なものと物的なものとの対比は、少なくともデカルトにまで遡ることができる。けれどもその対比が「志向性」を一つのキー・コンセプトとするようになったことは、現代哲学に特徴的であるといえよう。志向性という概念は、たしかに「心的なもの」の特性をあらわす重要な手がかりの一つであると考えられており、さらに一定の定式化も与えられた。その上で、志向性の自然的世界における位置づけの確定、あるいは自然化可能性という課題が提起されている。だがそのような問題設定を支える志向性の理解そのものが必ずしも一枚岩ではない。さらに議論の多くは、志向性と心、そして言語との関係をめぐってかなり基本的とも思われる前提を背景に伴ってもいた。

以上のような現在状況を見届けた上で「志向性」の概念の歴史的な遡源を試みるのは、それが比較的最近になって生み出された概念なので跡づけることが比較的容易だからというのではない。むしろ志向性をめぐる問題の生成過程においては、いくつかの――かなり歴史的に根深い――思考のあり方が錯綜している。そのなかには現在では少なくとも自明のこととしては受け入れることのできない想定も介在していた。そしてそのような想定も含めて、この概念の生成の消息は、現在の問題状況にも、いぜんとして影を落としている。また他方で、歴史的な跡づけの試みは、「志向性」という概念の可能性を別の仕方で考えるルートが存在したことをも示唆するであろう。それはとりわけ心的なものの指標として構想されたこの概念を、言語との関係から再考することを要請するだろう。――いささか遠回りをしながらもこの論考が示そうと試みるのは、このような理論的展望である。

III　ブレンターノにおける「志向的内在」（一）

14　「志向性」概念の生誕あるいは復活は、一八七四年であると考えられている。この年に刊行されたフランツ・ブレンターノの書『経験的立場からの心理学』*Psychologie vom empirischen Standpunkt* (Brentano 1874) において、この志向性概念の原型である「志向的内在」(intentionale Inexistenz) という概念が提示されたからである。[14]

しかしこの概念は、その書の主題ではなかった。表題が示すようにそれは「心理学」の書であり、「志向的内在」の概念も、ブレンターノの心理学のなかで理論的必要に応じて捻出されたものである。「志向的内在」の意味を理解するためにはこの理論的文脈を踏まえておくことが欠かせない。その大枠を簡単に復習しておく。[15]

ブレンターノの構想する心理学は、一言でいえば、心的現象に関する経験的方法による心理学といえるだろう。ただし、「心的現象」も「経験的方法」もブレンターノ独特の意味で理解されなければならない。

(i)　物的現象と心的現象の二分割　　ブレンターノは、われわれに現われるものとしての現象が、二つのクラスに完

全に分割されると考える。「われわれの現われの全領域は二つの大きなクラスにわけられる。すなわち物的な現象のクラスと心的な現象のクラスである」と彼は語る（S. 109）。

(ii) 現象という概念　ただし、しばしば指摘されるように、このブレンターノの「心的現象」（psychisches Phänomen）と「物的現象」（physisches Phänomen）との区別は、のちにそう解されるような、いわゆる「心的なもの」と「物的なもの」との区別とは重ならない。ブレンターノにとって一般的に「現象」（Phänomen）とは、原義に忠実に、われわれにしかじかと現われるもの、いわば意識に与えられるものとしての「現われ」なのである。したがって現象は、観察者などの心的な存在を離れては成立しえない。物的現象もこのような意味での「現われ」の一つのクラスであるから、われわれの用語法では「心的なもの」に含まれるであろう。

(iii) 経験的立場　また、ブレンターノのいう「経験的立場」とは、一方では、たとえば実体としての魂の存在などをはじめとした形而上学的想定にかかわることなく、あくまでわれわれの経験に基づいて遂行されるという意味をもつ。「経験だけが私にとっての師である」（S. 1）。

観念的な思弁の拒否[16]などとともに、経験への依拠はブレンターノの哲学の全般について妥当する特徴である。経験に基づくというかぎりでは、ブレンターノの「心理学」も経験科学と異なるものではない[17]。「心理学は、自然科学と同様、知覚と経験のうちに基礎をもつ」（S. 40）。

(iv) 心的現象の内的知覚　しかし他方で、いまの引用には「けれども、その第一の源泉は固有の心的現象についての内的な知覚である」という言葉がつづく。心理学の「経験的立場」は自然科学の方法とは同一ではない。ブレンターノの心理学はヴントにみられるような実験科学的なアプローチや生理学的なアプローチとは異なり、内的知覚（innere Wahrnehmung）の明証性に基づくものである[18]。心的現象は、われわれに現われるという意味で「現象」ではあるが、それらは通常の事物や事象と同じように観察することはできない。たとえば自分の怒りを観察しようとすれば、怒りは

すでにおさまっていなければならず、観察の対象とはならない。じっさいブレンターノの哲学に深い影響を与えた実証主義者コントは、心的現象を内的に観察することは、自己を観察するものと観察されるものとに二分割することになるという理由で、不可能であると考えた。この見解によれば可能なのは外的な観察のみであり、その結果心理学は生理学に帰着することになる。

だが、ブレンターノは次のように主張する。――たしかに心的現象について、内的な観察（innere Beobachtung）は不可能であろう。しかし内的な知覚（innere Wahrnehmung）ならば可能である。なぜなら、それぞれの心的現象においては、その心的な現象がそこに向けられている対象が意識される（対象意識）とともに、それに付随して、当の心的現象自身も意識される（知覚される）のである。「われわれの注意が別の対象に向けられているかぎりで、われわれは、付随的に（nebenbei）、その対象へと向けられている心的な過程を知覚することができる。したがって、外的な知覚における物的現象の観察は、われわれに自然に関する知識の根拠を提供するが、同時に心に関する知識を獲得する手段ともなるのである」（S. 41）。ブレンターノによれば、心的現象の内的な知覚こそ、明証的で不可謬であり、心理学の最も重要な方法である。

(v)　心的現象＝心的作用　　心的現象はそれ自体が物的現象と並ぶような観察の対象ではなく、対象に対する意識に付随したかたちで知覚されるのであるから、両者はひとつの心的体験における二つの局面である。じっさいブレンターノにとって心的現象とは、心的な作用（Akt）と置換可能な概念であり、しばしば実際に両者は換言されている。心的現象と物的現象は、基本的には、一つの体験の作用[19]と対象に相当するといえるだろう。

15　以上のように、心的現象という概念は、心理学の学としての独自性と統一性を支えるとともに、内的知覚という方法を通じて、明証的かつ厳密な知の対象となるものである。したがってブレンターノにとって、心的現象と物的現象の区別は決定的重要性をもつ。ブレンターノがこの区別について、きわめて入念な手続きのもとで確認しているのもそ

のためである。[20] そしてこの二つの現象を区別する最も重要な指標が、「志向的内在」(intentionale Inexistenz) の概念である。

まずその規定を見よう。

すべての心的現象は、中世のスコラ哲学者たちが対象の志向的（またおそらくは心的）内在と呼び、そしてわれわれが、完全に二義性を免れてはいない表現によってではあるが、内容への関係、あるいは対象（このばあい対象とは実在物 Realität のことであると理解してはならない）への方向性あるいは内在的な対象性と呼ぶものによって特徴づけられる。すべての心的現象は、すべてが同じ仕方ではないにせよ、何かを自分自身の内に対象として含むのである。表象においては何かが表象され、判断においては何かが肯定されあるいは否定され、そして愛においては愛され、憎しみにおいては憎まれ、欲求においては欲求される等々。この志向的内在こそ、心的現象のみに妥当する特徴なのである。いかなる物的現象も、それと何か同様のものを示すことはない。われわれはしたがって、心的現象を、自分自身の内に対象を志向的に含む現象である、と述べることによって規定できるのである。(Brentano 1874, S. 124f.)

このパッセージは、志向性という概念の生誕を告げるものとして、すり切れそうなほど繰り返し引用されてきた。もちろん実際には、ブレンターノは「志向性」(intentionalität) というタームを用いているわけではないが、その原型である「志向的内在」(intentionale Inexistenz) という概念がここで提示されている。ただし一見したところでも明らかなように、このパッセージで概念化されている心的現象のみに成立する特徴は、それ以外にもいくつかの言葉で言い換えられている。

(i) 志向的（心的）内在　intentionale (mentale) Inexistenz

(ii) 内容への関係　Beziehung auf einen Inhalt

(iii) 対象への方向性　Richtung auf ein Objekt

(iv) 内在的な対象性　immanente Gegenständlichkeit

(v) 自分自身の内に（志向的に）対象を含む（intentional）einen Gegenstand in sich enthalten

これらは心的現象を規定する同一の特質についての記述である。ブレンターノがその特質を的確に表現するために苦心していることは明らかだろう。おそらくより適切な表現を求めて、スコラ哲学的な概念である「志向的」(intentionale) という形容をここで復活させたと推測できる。

16　しかしその努力にもかかわらず、以上のさまざまな表現には異なった意味の方向性が存在することを覆い隠すことはできない。大まかに分けて、二つのニュアンス、あるいは含意が識別される。それは、(i)(iv)(v)が含みもつ「内在性」と(ii)(iii)が示唆する「指示性」とに集約できるだろう。ブレンターノの志向的内在の概念には、この二つの要素が一種混在しているように見える。そして事実、そのことがこの概念を精確に取り押さえようとしてきた人々を困惑させ、解釈の相違を生み出した一因でもある。

この志向性概念の歴史的系譜づけについて古典的ともいえるシュピーゲルベルクの研究は、ブレンターノのこのパッセージでは心的現象について、いま述べたような二つの区別される特徴づけが与えられると解する。そして、その一方である対象の内在という局面は、スコラ哲学的な意味での intentio を継承したものであり、もう一方の対象への指示・参照という局面こそがブレンターノの新たな独創であると主張する（Spiegelberg 1969）。つまりブレンターノは、いわば古い革袋に新しい酒を盛ったことになる。そして前者の「内在的」局面がブレンターノの哲学に一種の危機（Immanenzkrise）をもたらし、その「内在的」局面は切り落とされることになった――そしてフッサールでは「指示的な機能」へと概念的に純化された――と考える。[21]

実際この二つの局面のどちらに照明を当てるのかによって、ブレンターノの志向性の概念はかなり異なった相貌を見

せる。ここではそうした事情に深く関連するチザムとマカリスターの間の論争に若干ふれておこう。それは志向性の原型となったこのような心的現象の指標――暫定的に「志向的内在」という概念で代表させる――のもつ問題の一端を見届けることにもなるからである。

17　チザムの基本的理解は次のようなものである。[22] 彼は「志向的内在」の概念が、実質的には心理的テーゼと存在論的テーゼの二つのテーゼから成立していると考える。存在論的テーゼ（ontological thesis）とは、志向的内在という概念がある独特の存在論を伴うという見解である。たとえばある人がユニコーンについて考えるとき、ユニコーンは現実に存在するのとは異なるある種の存在様態をとる。つまり志向的に関係する対象は、志向的内在という独特の存在様態をもつのである。心理的テーゼ（Psychological thesis）は、対象への指示ないし参照のあり方の相違が心的なものと物的なものを区別するというものである。この心理的テーゼは一貫して保持されるが、心的なものに固有な指示のあり方は、(i)関係する「対象」のタイプの相違、あるいは(ii)対象への「関係」の仕方の相違のいずれかに基づく。初期ブレンターノは心理的テーゼを存在論的テーゼと連動して、つまり(i)に依拠して理解したのに対して、後期ブレンターノはこの存在論を放棄し、(ii)に基づいて理解する。心的現象に見られる関係性は、実は擬似的な関係（relativisches）でしかなく、関係を成立させる両方の項の存在を必要としないのである。志向的内在は特殊な存在様態から特殊な関係性へと変貌した。――これはブレンターノの忠実な弟子クラウスをはじめとしたオーソドックスな解釈の明晰化であるといえよう。

これに対してマカリスター[23]は、心的現象と物的現象との相違は、心的現象が物的現象の領域[24]では成立しえないユニークな関係をもつことに基づくのであり、その関係とは何かを対象とするという関係であると主張する。そしてこの関係性が志向的内在性なのである。他方でブレンターノは、対象となるものが現実に存在することとは別の存在様態をもつというような、特殊な存在論テーゼにはコミットしていなかった。――このようなマカリスターの解釈では存在論的テ

ーゼをブレンターノは最初から採用せず、心理的テーゼを(ii)に基づいて理解していたことになるから、先のオーソドックスな見解における後期のブレンターノとむしろ類似していると言いうる。

18　以上の二つの見解は、「志向的内在」の特性の記述に潜在している「内在性」と「方向性」という二つの含意のうち、チザムの解釈が「内在性」を、他方マカリスターの解釈が「方向性」をそれぞれ重視したものであると見ることもできるだろう。ブレンターノの「志向的内在」にまつわるさまざまな表現そのものが、ある揺れをもっている。解釈の紛糾は、概念を新たに導入するにはふさわしくない不用意で曖昧な彼の記述の仕方に責めがあるかもしれない。

しかしブレンターノ自身は、「志向的内在」の概念を創出したとは考えていなかった。彼にとっては、むしろすでに先取りされていたものを復活させたのである。先に引用した箇所（Brentano 1874 S. 124f.）への注で、ブレンターノはこの概念を先取りした先駆者を複数挙げているが、そのなかで真先に指名され最も重要な哲学者はアリストテレスである。この評価は、アリストテレスに次の三つの見解が帰されることに基づく。

(1)　感覚されたもの（das Empfundene）は、感覚されたものであるかぎりで、感覚される主体の内にある。

(2)　感覚は、感覚されたもの（das Empfundene）を、質料（素材）抜きで受け取る。

(3)　思考されたもの（das Gedachte）は思考するものの内にある。

さらに、「志向的内在」という概念にとってのアリストテレス哲学の重要性は、彼の他の著作からも確証される。

ブレンターノは一九〇五年三月十七日付のマルティ宛の書簡において、自らが提示した「いわゆる〈内在的あるいは志向的対象〉について」――これはのちに編者がこの書簡に付した表題である――論じ、それまでに受けた誤解、とりわけ内在性が対象の独特の存在性格を意味するというような、彼のいうところでは「誤解」をしりぞけながら、やはりその正確な理解をアリストテレスに求め、次のように述べている。

アリストテレスはまた、感覚は形相を質料抜きで受容する（ちょうど、まさに、知性が知性的形相を質料から抽象し

て受け取るように)、とも語っている。彼は本質的にはわれわれと同じように考えていたのではないか。(Brentano 1930, S. 88)

ここで「志向的内在」と「本質的に同じ考え方」とされている「質料抜きで形相を受け取る」というアリストテレスの論点は、『経験的立場からの心理学』の歴史的回顧の註でも言及されていたもの(先の(2))である。

ブレンターノは、このようなアリストテレス的理解との重ね合わせが正当であることに自信を持っていたであろう。彼には、アリストテレスの『デ・アニマ(魂について)』に関する自分自身の研究(Brentano 1867)という裏づけが存在したからである。この研究が水準の高いものであることは、『デ・アニマ(魂について)』をめぐって現在最も議論の中心となっている論文集(Nussbaum and Rorty 1992)に一九世紀の研究(というより一九七〇年代以前の研究)では唯一収録されていることからも明らかである。さらに当時でも炯眼の士たちは、その重要性を見抜いていた。ほとんど指摘されることのない例を挙げるなら、J・S・ミルがある書評においてブレンターノのこの研究を激賞している。[25]

19　では「志向的内在」と重ね合わせられる「質料抜きで形相を受け取る」とはどのようなことなのか。いやむしろ、ブレンターノはそれをどのように解釈したのか。『デ・アニマ(魂について)』の研究では、次のような説明を与えている。

われわれは、冷たくなるかぎりでは、冷たさを感覚しない。もし感覚するならば、植物や非有機的な物体なども感覚することになるだろう。むしろわれわれが冷たさを感覚するのは、冷たさが対象的に、すなわち認識されたものとしてわれわれの内に存在する(das Kälte objectiv, d. h. als Erkanntes in uns existiert)かぎりであり、したがってわれわれは、われわれ自身がその物的な主体となることなく、冷たさを内に受容するかぎりにおいてである。それゆえアリストテレスは『魂について』第二巻十二章で感覚は感覚される形相を質料(素材)抜きで受け取ると語るのである。(Brentano 1867, S. 80-1)

ブレンターノのアリストテレス研究に正当に着目し検討したリチャードソン（Richardson 1983）によれば、こうした記述は、（チザムらが主張するような）志向的内在が存在論的テーゼを伴っているという解釈を斥ける典拠となる。いま引用した箇所の「質料抜きでの形相の受容」を説明する「対象的にわれわれのうちに存在する」という事態は、感覚する主体内における対象の存在、あるいはその対象のレプリカの存在とはかかわりがない。なぜなら、もし主体の内に冷たさが物理的に存在するとすれば主体は冷たくなるが、これは冷たさを感じることと同じではないからである。対象的内在あるいは対象的受容を、主体の内に対象が存在することと関係させて説明するのは、質料的な受容と対象的な受容とを混同することにほかならない。だがその区別こそまさにアリストテレスがこのパッセージで明らかにしようとしていたものである。つまり質料を伴う受容と質料抜きでの受容との対比は、主体の内に受容される対象が存在論的に異なる――一方は現実的存在であり他方は非現実的存在など――ことによって説明されるのではなく、異なる受容の様態によって説明されるのである。質料的な受容においては、主体はその性質を実現する。たとえばその主体は暖かくなる。対象的受容においては、主体は、それと同じ意味で性質を実現するのではなく、それを「認識する」。つまり主体は、冷たさを思考したり感覚するのである。

対象の志向的内在とはこのような質料抜きでの対象的受容と同一視されるものである以上、心的作用の対象に対する独特の関係を表すための概念であり、その関係とは、対象を認識するという仕方で成立する。それゆえ、志向的内在とは心的作用の対象に独特の存在論的身分を認めるものだという存在論的テーゼは疑わしくなるだろう。[26]

20　リチャードソンの考察は、志向的内在を特殊な存在形態として考えるチザムらに対してはかなり有効な批判となっている。このようにブレンターノのアリストテレス解釈を確認することは、志向的内在の概念を支えていたブレンターノの思考を解きほぐす。事実また近年では、初期ブレンターノとアリストテレス哲学との関係はいくつかの研究が重視するところでもある。[27]

しかしこのアリストテレス哲学という背景には、そうした研究の見通す以上の思想的奥行きがあるように思われる。そしてその奥行きは、「志向的内在」が特殊な存在様態かどうかという問題設定だけでは十分に捉えられないのではないか。

たとえば、前節で、引用したアリストテレスの「質料抜きでの受容」についてのブレンターノの解釈の記述をもう一度見てみよう。そこで使用されている「対象的」(objectiv) というタームは、アリストテレスよりはるかのちの、そして別の思想的系譜に根ざすものである。さらにこの箇所に対する注では、次のような補足が与えられている。

この箇所と以下において、われわれは「対象的 objectiv」という表現を近年の慣例的な意味［客観的］ではなく、中世のアリストテレス主義者によってこの言葉に結びつけられている意味（スコラ哲学の用語での objective）で用いる。そのことによってアリストテレスの教説を簡潔で正確に特徴づけることができる。質料的には、物的性質として、冷たさは冷たいものの内に内在する。対象としては、すなわち感覚されたものとしては、その冷たさを感じるその人に内在する。(Brentano 1867, S. 80 n.6)

ブレンターノは、「志向的内在」の概念の先取りであるアリストテレスの感覚や思考における「質料抜きでの受容」を、（スコラ的な意味で）objective, objectiv であると表現し、それによって「簡潔で精確に特徴づけることができる」と述べる。「志向的内在」の意味は、「質料抜きでの受容」というアリストテレス的概念だけでなく、「対象的」ということの理解にも連動・依存するのである。

21　ブレンターノの理解する「対象的」ということの一端は、次のような議論に示されている。彼は、一八八九年三月二七日のウィーン哲学協会での講演において、対応説的真理観を擁護する議論のなかで、ディルタイに帰される対応説批判を検討する。「事物は観念とは独立の実在物であると考えられる限りにおいて、観念や表象は事物と同一であることはできない。観念は精神の内に持ち込まれた事物ではなく、対象と一致させることは不可能である」、つまり、精

神の内なる観念が精神の外なる事物そのものと同一となるという対応説的な真理観は不合理であるという批判である。これに対して、ブレンターノは次のように反論する（§29）。

しかしそれにもかかわらず、このような論証は完全に不当である。それはデカルトが形相的実在と対象的実在との区別として表現した相違、しかし彼よりもはるか以前に……アリストテレスが十分に明らかにした相違を認識しそこなっていることに基づく。

もし私が、何かを信じるならば、この信念は形相的に私の内にある。私が後になって、この信念を思い出すとき、デカルトの表現にしたがうならば、その信念は「対象的」objektiv に私の内にある。どちらの場合も、同一の特定の信念の作用がかかわっている。しかし一方の場合は私がその信念を遂行しているのであり、他方の場合は、わたしが行う思い出すということの内在的対象（immanente Gegenstand）にすぎない。同様に他のすべての心的機能、意志、欲求、嫌悪、その他についても、それ自体は形相的に与えられる心的作用とともに、何かが心的作用の内在的対象として成立するのであり、デカルトの用語では対象的に与えられている、あるいは誤解を避けるためには、志向的に与えられると語ることによって、われわれは一層的確に表現することになるだろう。したがって、個々に同一のものが志向的には私の内に内在するが形相的には内在しない、あるいはその逆であるということには、……なんらの矛盾もない。（Brentano 1930, S. 17-18, 強調は引用者）

ここでは、「志向的内在」という概念がデカルト的な意味での「対象的に私の内にある」「対象的に与えられている」などの概念によっても先取りされていることが表明されている。そしてこれらの概念は、ある外在する事物と一致する何かの「内在」性を確保するために用いられている。「志向的」とはそのような意味で「内在する」という事態の「いっそう適切な表現」なのである。

すると「志向的内在」の意味を確定するためには、ブレンターノがデカルトの objectivus, objective という概念をど

のように解釈していたのかを確認しなければならないだろう。たとえばそれが存在論的テーゼを伴っているのかという争点は、この概念のブレンターノ的解釈をも巻きこむことになる。結局この種の議論は、水掛け論的になることを完全に免れることはむずかしいかもしれない。

けれども以上のパッセージは、志向的内在の概念について、それが特殊な存在様態を伴うかどうか、という問い以上に重要な局面を示唆しているのではないか。――すなわち、この概念の背後に控えるアリストテレス哲学とデカルト主義との関係である。いま引用した箇所の志向的内在の説明においては、デカルトとアリストテレスの思考が、矛盾なく同一の理解を示すものとして併置されていた。

予告的に述べるならば、ブレンターノは本来相反するこの二つの思考の方向を「志向的内在」という一つの概念に詰め込んだのである。[28] しかしこの二つの思考は、調和的に共存しうるものではなかった。たとえばこの概念の内部に走る「内在性」と「指示性」との亀裂（17節参照）も、この両者の断層に由来する。そして現代の志向性概念も、その複数的性格の可能性（7節参照）も含めて、やはりそこから地続きなのである。

［未完］

註

＊ 本稿は二〇〇〇年一一月三日の京都哲学会での講演に大幅に手を入れたものである。ただし、議論の調子や話題にのぼる例などは、その講演会の雰囲気をとどめたものとなっている。

(1) この確認のために参照したのは、Auroux 1990; Burkhardt and Smith 1991; Craig 1998; Gregory and Zangwill 1987; Guttenplan 1994; Ritter and Gründer 1971; 廣松渉他 一九九八などである。

(2) このような問題意識は、さっと見渡しただけでも次のような文献に表明されている――Field 1978/1981, pp. 78-9; Stalnaker 1984 p. 6; Fodor 1990a, p. 32; 1990b, pp. 202-3 Dretske 1988; Millikan 1984, esp. chap.5; Haugeland 1990, p. 385; Lyons 1995, p. 5; McGinn 1991, p. 23; Shoemaker 1994, p. 56; Jacob 1997, p. 1 etc. etc. とりわけ過激なのは Fodor 1990b であり、もし志

向性が自然化できないならば、認知科学者たちは国からの研究費を返上すべきだと主張する。他方このような課題設定に対する疑念は Stich and Laurence 1994 ; Tye 1994 において表明されている。

(3) 言うまでもなく、自然的なタームによる「説明」にも、心的説明を完全に自然科学的説明へと還元するという強い立場から、心的事象と物理的事象とのタイプあるいはトークンの同一性の主張、あるいは「依存生起」supervenience という関係の承認など、さまざまなかたちがある。

(4) 「現象学全体を包括する問題の名称は、志向性と言い表される」(Husserl [1913] 1950, S. 303)。

(5) たとえば、比較的初期の志向性の分析を代表する Field 1978 は、彼の言う「ブレンターノの問題」(Brentano's problem) を論じたものだが、実際にはブレンターノ自身の議論を読んだ形跡はまったくない。

またブレンターノを読まずに議論が行われていることをよく示すのは、intentionale Inexistenz の Inexistenz という概念が「非存在」(nonexistence) を意味するという誤解であろう。Dennett 1969, p. 21 ; Tye 1994, pp. 122-3 ; Tye 1995, pp. 94-95 などだけでなく、標準的事典であるはずの Gregory and Zangwill 1987 でも繰り返されている (日本語の文献でも「志向的非存在」という訳語があてられているものもある)。

(6) この想定については、本稿12節参照。また本稿の続編において再度とりあげられるであろう。

(7) マクダウェルは「内容」(言語の意味) を外側から説明することが不可能であるという主張をキー・テーゼとする、ブレンターノの名に結びつく哲学的伝統が存在するとして、チザムの分析に言及している (McDowell 1987)。またマクダウェルに従うなら、クリプキの問題提起以来喧しい「規則に従う」(rule-following) ことについてのウィトゲンシュタインの議論の核心も、このような伝統に親近的であることになるだろう (McDowell 1984)。

(8) 「誤った仕方で表象すること」(misrepresentation) ことの哲学的意義を明快に指摘した代表的論考は Dretske 1986 である。

(9) この点に関連して、近年の志向性をめぐる議論においては、心の自然化という課題の遂行にとって、心の特質としての志向性は、経験の主観的ないし現象的局面あるいは現象的意識 (phenomenal consciousness) と呼ばれるものに比べて乗り越えることの容易なハードルであると考える傾向が存在することを報告しておくべきだろう (たとえば、Chalmers 1996 ; Block 1998 ; Kim 1998)。

しかし、このような見解を受け入れることには慎重にならざるをえない。なぜならたとえば Elian 1998 が指摘するように、こ

のような扱い方は志向性が意識の現象的局面から独立であるという想定に基づくが、そのような想定は志向性の問題をそもそも適切に捉えているかという点で疑問の余地があるからである。

(10) Field 1978/81, pp. 78-9 ; Searle 1983, p. 1 ; Dretske 1995, p. 28 ; McGinn 1982, p. 8 ; Jacob 1997, pp. 9-10. このような見方に対して、Crane 1998 はブレンターノ的精神に基いて批判的に検討している。

(11) たとえば、Chisholm 1984. ちなみに、このような心の志向性の第一次性という想定に対して、少し異なった理論的背景からではあるが、隠然と支持を与えたのはグライスの intention-based semantics であろう。チザムはいま言及した論文において、彼の見解がグライスの分析によく適合することを論じているし、もちろんサールの志向性の分析もグライスの影響下にある。

(12) 志向性についての議論が現象学的な立場からの分析にかなり拘束されているように見えるドイツ語圏においても、トゥーゲントハットが、フッサールの志向性概念に対して批判を展開していることが知られている。彼によれば信念や欲求などいわゆる命題的態度がかかわる事態（志向的内容とよばれるもの）は、ある命題が名辞化（nominalisieren）され、その命題全体の意味がそれによって対象化されて初めて成立する。しかし述語構造をもつ命題を作成する述定の言語能力は志向性よりも根本的である。志向的な対象や内容は、そのような言語能力を前提するとされる（Tugendhat 1970）。

他方でフォーダーの志向性の分析（e. g. Fodor 1987 ; 1990）は、心理的状態が何らかの仕方で脳に組み込まれた「思考の言語」によって成立するという点では、ある意味で言語の志向性を心の志向性に優先させていると言えなくもない。しかしこの「言語」とは、われわれの通常の言語――公共的に理解されるもの――とは明らかに別物であり、いま論じている言語と心の志向性の優先関係という問題からははずして考えた方がよいだろう。

(13) セラーズとチザムの間の論争を念頭においている（具体的なやりとりとしては、Chisholm and Sellars 1958 を参照）。ただし Bealer はこの論争を、志向性が基礎的には言語に属するというセラーズのテーゼは、グライスの影響もあり、英語圏のほとんどの哲学者たちの支持を失っていると総括している（Burkhardt and Smith 1991 p. 402）。この点については、そのような総括の正当性も含めて、本稿の続編で論じられるであろう。

(14) ブレンターノ自身は 'Intentionalität' というタームを用いてはいない。ブレンターノの影響のもとにこのような術語化をほどこしたのはフッサールである。ちなみに英語の 'intentionality' は、OED などによれば、ホッブスが『リヴァイアサン』I. iv. 12 でスコラ学派の無意味な用語として挙げたり、ベンサムが『道徳と立法の諸原理序説』（*An introduction to the principles of*

morals and legislation) vii, 6-7 において行為に伴う意図を表すのに用いているのが最初期の用法らしい。

(15) ブレンターノについて以下で初歩的ともいえる事柄も含めて復習をするのは、彼の哲学が、近現代哲学の歴史記述において盲点のような位置にあったことを考慮している。近年では、「分析哲学の起源」の探究という文脈などからブレンターノへの注目度は増しつつあるが（そのなかで比較的知られているのは Dummett 1993 などであろう）、そうした再評価もかならずしも十分ではないように思われる。事実最近でも、ブレンターノは現代哲学にとってなぜ「透明人間」(invisible man) であるのかということ（「ブレンターノの謎」と呼ばれる）をテーマにしたシンポジウムが催されている（Poli 1998 はそれに基づく論文集）。邦語文献では、竹尾、一九九一がマイノンクとの関係に、村田、一九九三がフッサールとの関係にそれぞれ注目しつつブレンターノについて簡潔ながら要を得た説明を与えている。

(16) ブレンターノの哲学はドイツ観念論への大いなる幻滅とそうした思弁への拒否を出発点の一つとしている。彼の見るところ、古代においてはプラトンとアリストテレスにおいて哲学がその頂点を迎えるのに対してプロティノスが衰微の典型であるのと同様に、近代においてはデカルト、ロック、ライプニッツがその頂点であるのに対して、カント以後のドイツ観念論は衰微する過程に他ならない。ヘーゲルへの悪罵（Brentano 1926, S. 23）は痛快なほどである。

(17) ブレンターノが実際に目指した哲学の方法論は、経験的で実証的であり、自然科学と本質的には異ならない。Vera philosophiae methodus nulla alia nisi scientiae naturalis est というのが彼の有名なモットーである（ブレンターノがヴュルツブルク大学に就職したときの二五のラテン語のテーゼのうちの第四のもの）。この点でブレンターノは実証主義の祖であるコントを高く評価するとともに、方法論についてコントの影響下にある。

(18) やがてブレンターノは、彼の構想する倫理学を「発生的心理学」と区別・対比して「記述的心理学」としてこの相違を明確化する。後者こそが厳密な学として「純粋心理学」の名称に値するというわけである。だが、そののちの心理学の展開から見れば、現在の心理学に対する貢献度は、ブレンターノよりヴントに軍配があがることは否定できない。

しかしブレンターノは、フロイト流の精神分析に対して一定の貢献を果たしている。フロイトはブレンターノに学び、ブレンターノを評価した（Gay 1998, p. 29）。さらにブレンターノの薦めで、著名な古代思想研究者ゴンペルツが編纂していたJ・S・ミルのドイツ語版全集の翻訳（Mill 1880）をいくつか担当することになる。ブレンターノがフロイトに与えた影響は、それほど明瞭ではないかもしれないが、フロイトの基本的思想のうちにはブレンターノから継承された部分があるという評価（Wollheim

1971, pp. 20-21) もある。

(19) ただしその作用（Akt）という概念も、心的なもののはたらきかけや能動性という性格だけをとくに強調するのではなく、ましてや「行為」を意味するものではない。むしろその含意は、Münch 1993, S. 54-55 らの指摘するように、スコラ哲学における actualitas やその源泉となったアリストテレスの *ἐνέργεια* を念頭に置いて理解されるべきであろう。

(20) 両者の区別についての本格的な議論は、百頁以上を費やし、すでにかなりこの区別を先取りしているように見える方法論に関する考察（erstes Buch）のあとに開始される。その議論も、物的現象と心的現象の具体例の枚挙からはじめて複数の区別の指標を挙げて検討していく慎重なものである。

(21) ただしシュピーゲルベルクのこの研究は重要ではあるが、とりわけスコラ哲学の intentio の概念を内在的とみる捉え方をはじめとして、そのまま無条件に受け入れることはできないだろう。

(22) いくつかの論文でこの種の見解は表明されているが、最も詳しいのは Chisholm 1967 簡明なのは Chisholm 1967b だろう。

(23) McAlister 1974 参照。McAlister 1970 は彼女自身も認めるように、オーソドックスな見解に近い。

(24) マカリスターの解釈のもう一つの中心的論点は、物的現象は色や音などの可感的性質に限定されるというものだが、これについては議論の余地は多い。たとえば、ブレンターノが「物的現象」を事例の枚挙によって説明するとき、「色、形」にならんで、可感的性質とはいえない「風景」（Landschaft）が含まれていること（Brentano 1874, S. 112）が物議を醸してきた。フッサールが「風景」を強調した上でブレンターノを論難する（Husserl 1975, 226）のに対して、クラウスは同箇所への注（S. 266-8）で、この事例がブレンターノの筆が滑ったものと解釈する。逆に、リチャードソンはブレンターノの「物的現象」がそもそもこのような広い意味を持っていると主張する（Richardson 1983, pp. 262-3）。

(25) 'A full and elaborate treatment of it [=*νοῦς πολιτικός*], grounded on a comprehensive view of Aristotle's metaphysical doctorines, has been given by ...Dr. Franz Brentano, in a work On the psychology of Aristotle, especially with reference to the *νοῦς πολιτικός*, which, without venturing to decide whether the author has established all the points, the present writer cannnot help noting as one of the most thoroughly executed pieces of philosophical research and exegesis'――プラトンとアリストテレスという古典をはさんだブレンターノ、ミル、そしてフロイト（註18）の思想的交錯の関係は興味深いが、ここはそれを論じる場面ではない。

(26) それ以外にも、リチャードソンは同じく『アリストテレスの心理学研究』(Brentano 1867) から存在論テーゼをブレンターノに帰すことの困難を指摘している。存在論テーゼは心的現象の向けられている志向的対象について、現実には存在しなくとも別の仕方で存在するという、独特の存在論的様態を認めるものであった。しかしそのような理解は、むしろ現実に存在するものの場合に、重大な困難を惹起する。なぜなら「対象の志向的内在」とは、すべての心的現象について妥当するものでなければならないからである。しかし、現実に存在する対象についての知覚や思考が、そうでない存在様態を持つある対象に関わっているという想定は、それ自体奇妙であるというばかりではなく、ブレンターノ自身が『アリストテレスの心理学研究』で、次のように批判しているのである。

何かを知ろうとしたある人が、知性によって、かわりにそれとは別のものを理解し、そのことによって彼が望んでいた知識に到達したというのは、おかしな言明であることは明らかだろう。たとえば、ある自然探究者がこの大地に見出す水晶や植物について知ろうとして、四面体や八面体の概念、あるいは他の世界に属する樹木や草の概念を把握したとしても、彼は決して自分の目的に到達したことにはならない (Brentano 1867. S. 135)。

このリチャードソンの指摘は意義深い。ここに表明されている思考は、ブレンターノの研究者がブレンターノの後期の立場を表すものとしてしばしば引き合いに出す次の指摘と同質であるといってよいからである。

ある男がある ens rationis と結婚すると約束し、その約束を実在の人物と結婚することで果たすというのはパラドクシカルである (一九〇九年のクラウス宛書簡、Brentano 1874, xlix に引用されている)。

(27) Richardson 1983; Smith 1994 など多いなかでとりわけ詳しく論証しているのは Münch 1993 である (ただしその問題点についても本稿の続編で触れることになるだろう)。

(28) ブレンターノへのデカルト主義的思考の影響はもちろんこれまでも数多く指摘されている。また他方で、すでに述べたように、アリストテレスの影響も重視されている。私が本考察の続編で立証したいのは、ブレンターノによるアリストテレスの読解そのものが、デカルト的と言ってよい概念的枠組みの拘束を受けていたこと、そしてその枠組みは、本来のアリストテレスの哲学といくつかの基本的論点において相容れないものであること、さらにそのような経緯で登場した志向的内在の概念には、デカルト的内在主義とアリストテレス的外在主義が、前者に比重をおきながら、奇妙な仕方で混在していたということである。

引用文献表（出版年が並記されているものの引用は、後者の頁数による）

Auroux, S. 1990. *Les Notions philosophiques : dictionnaire*. (Encyclopédie philosophique universelle ; 2). Paris : Presses Universitaires de France.

Block, N. J. 1986. 'Advertisement for a semantics for psychology'. In *Studies in the philosophy of mind* (Midwest studies in philosophy ; v. 10). edited by P. A. French et al.. Minneapolis : University of Minnesota Press. 615-78.

———. 1998. 'On a confusion about a function of consciousness'. *Behavioral and Brain Sciences* 18 : 227-287.

Brentano, F. C. 1867. *Die Psychologie des Aristoteles, in besondere seine Lehre von NOUS POIETIKOS*. Mainz : Franz Kircheim.

———. 1874. *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Leipzig : Duncker and Humblot. edn. rev. Osker Klaus, Leipzig : Felix Meiner, 1924, repr. Hamburg : Felix Meiner, 1955-59.

———. 1926. *Die vier Phasen der Philosophie und ihr augenblicklicher Stand ; nebst Abhandlungen über Plotinus, Thomas von Aquin, Kant, Schopenhauer und Auguste Comte*. hrsg. von O. Kraus. Leipzig : F. Meiner.

———. 1930. *Wahrheit und Evidenz ; Erkenntnistheoretische Abhandlungen und Briefe, ausgewählt, erläutert und eingeleitet*. Leipzig : Felix Meiner.

———. 1986. *Über Aristoteles : Nachgelassene Aufsätze*. Hamburg : Felix Meiner.

Burkhardt, H., and B. Smith. 1991. *Handbook of metaphysics and ontology*. Munich ; Philadelphia : Philosophia Verlag.

Chalmers, D. J. 1996. *The conscious mind : in search of a fundamental theory*. New York : Oxford University Press.

Chisholm, R. M. 1955/56. 'Sentences about believing.' *Proceedings of the Aristotelian Society* 56 : 125-148.

———. 1957. *Perceiving : a philosophical study*. Ithaca : Cornell University Press. (中才敬郎ほか訳、一九九九、『知覚』、東京：勁草書房)

———. 1967. 'Brentano on descriptive psychology and the intentional.' In *Phenomenology and Existentionalism*, edited by E. N. Lee and M. Mandelbaum. Baltimore : Johns Hopkins University Press. 1-23.

———. 1967b. 'Intentionality.' In *The Encyclopedia of philosophy*, edited by P. Edwards. New York : Macmillan. 201-204.

———. 1984. 'The primacy of the intentional.' *Synthese* 61 : 89-109.

Chisholm, R. M., and W. Sellars. 1958. 'Intentionality and the mental (a symposium by correspondence). 'In *Minnesota Studies in the Philosophy of Science* II, edited by H. Feigl, M. Sctriven and G. Maxwell. Minneapolis : Minnesota University Press. 507-21.

Craig, E., ed. 1998. *Routledge encyclopedia of philosophy*. London : Routledge.

Crane, T. 1998. 'Intentionality as the mark of the mental.' In O'Hear 1998. 229-251.

Dennett, D. C. 1969. *Content and consciousness*. London : Routledge & K. Paul.

Dretske, F. I. 1986. 'Misrepresentation.' In *Belief*, edited by R. Bogdan. Oxford : Oxford University Press.

———. 1988. *Explaining behavior : reasons in a world of causes*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

———. 1995. *Naturalizing the mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Dummett, M. 1991. *Frege and other philosophers*. Oxford : Clarendon Press.

———. 1993. *Origins of analytical philosophy*. London : Duckworth.

Elian, N. 1998. 'Perceptual intentionality, attention and consciousness.' In O'Hear 1998. 181-202.

Field, H. H. 1978/1981. 'Mental representation.' *Erkenntniss* 13 : 9-61. repr. in Block, N. J., ed. 1981. *Readings in philosophy of psychology*. Vol. 2. Cambridge, Mass. : Harvard University Press. 78-114.

Fodor, J. A. 1987. *Psychosemantics : the problem of meaning in the philosophy of mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

———. 1990a. *A theory of content and other essays*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

———. 1990b. 'Roundtable discussion. 'In *Information, language, and cognition*, edited by P. P. Hanson. Vancouver : University of British Columbia Press.

French, P. A., T. E. Uehling, and H. K. Wettstein, eds. 1994. *Philosophical naturalism*. (Midwest studies in philosophy ; v. 19). Notre Dame, Ind.: University of Notre Dame Press.

Gay, P. 1988. *Freud : a life for our times*. New York : W.W. Norton. (鈴木晶訳　一九九七『フロイト』東京：みすず書房)

Gregory, R. L., and O. L. Zangwill. 1987. *The Oxford companion to the mind*. Oxford ; New York : Oxford University Press.

Guttenplan, S. D., ed. 1994. *A companion to the philosophy of mind*. Oxford : Blackwell.

Haugeland, J. 1990. 'The intentionality All-Stars.' In *Action theory and philosophy of mind*. (Philosophical perspectives ; 4), edited by J. E. Tomberlin, Atascadero : Ridgeview Pub. Co. 383-427.

Husserl, E. [1900] 1975. *Logische Untersuchungen*. Hrsg. von U. Panzer. (Husserliana ; Bd. 18-19). Den Haag : M. Nijhoff.

———. [1913] 1950. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. (*Husserliana. Bd. 3-5.*). Den Haag : M. Nijhoff.

Jacob, P. 1997. *What minds can do : Intentionality in a non-intentional world*. Cambridge : Cambridge University Press.

Kim, J. 1998. 'The mind-body problem after fifty years.' In O'Hear 1998. 3-21.

Lévinas, E. 1949. *En découvrant l'existence avec Hussert et Heidegger*. Paris : J. Vrin.

Lyons, W. 1995. *Approaches to intentionality*. Oxford : Clarendon Press.

McAlister, L. L. 1970. 'Franz Brentano and intentional inexistence.' *Journal of the History of Philosophy* 8 : 423-430.

———. 1974. 'Chisholm and Brentano on intentionality.' *Review of Metaphysics* 28 : 328-338.

McDowell, J. 1984. 'Wittgenstein on following a rule.' *Synthese* 58 : 325-364.

———. 1987. 'In defence of modesty.' In *Michael Dummett : Contribution to Philosophy*. edited B. M. Taylor. Dordrecht : Martinus Nijhoff Publishers. 59-80.

McGinn, C. 1982. *The character of mind*. Oxford : Oxford University Press.

———. 1991. *The problem of consciousness : essays toward a resolution*. Oxford : B. Blackwell.

Mill, J. S. 1875. 'Grote's Plato.' In *Dissertations and Discussions* vol. 4. London : Longmans Green. repr. in Mill, J. S. 1978. *Essays on philosophy and the classics*. Edited by J. M. Robson. (Collected works of John Stuart Mill ; vol. 11). Toronto : University of Toronto Press.

———. 1880. *Über Frauenemancipation ; Plato ; Arbeiterfrage ; Socialismus*. Übers. S. Freud, hrsg. von T. Gomperz. (John Stuart Mill's gesammelte Werke 9). Leipzig : Fues's Verlag.

Millikan, R. G. 1984. *Language, thought, and other biological categories : new foundations for realism*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Moran, D. 1996. 'Brentano's thesis.' *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume* 70 : 1-27.

Münch, D. 1993. *Intention und Zeichen : Untersuchungen zu Franz Brentano und zu Edmund Husserls Frühwerk*. Frankfurt am Main : Suhrkamp.

Nussbaum, M. C., and A. O. Rorty, eds. 1992. *Essays on Aristotle's De anima*. Oxford : Oxford University Press.

O'Hear, A., ed. 1998. *Current issues in philosophy of mind*. Cambridge : Cambridge University Press.

Poli, R., ed. 1998. *The Brentano puzzle*. Aldershot ; Brookfield : Ashgate.

Quine, W. V. 1960. *Word and object*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Richardson, R. 1983. 'Brentano on intentional inexistence and the distinction between mental and physical phenomena. '*Archiv für Geshichte der Philosophie* 65 : 250-282.

Ritter, J., and K. Gründer. 1971. *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. 6 vols. Basel : Schwabe.

Rorty, R. 1979. *Philosophy and the mirror of nature*. Princeton : Princeton University Press.

Searle, J. R. 1983. *Intentionality, an essay in the philosophy of mind*. Cambridge : Cambridge University Press. (坂本百大ほか訳' 一九九七' 『志向性』東京：誠信書房)

Shoemaker, S. 1994. 'The mind-body problem.' In Warner 1994. 55-63.

Smith, B. 1994. *Austrian philosophy : the legacy of Franz Brentano*. Chicago : Open Court.

Spiegelberg, von H. 1969. '《Intention》 und 《Intentionalität》 in der Scholastik, bei Brentano und Husserl.' *Studia Philosophica* 29 : 189-216. repr. of 'Der Begriff der Intentionalität in der Hochscholastik, bei Brentano und Husserl' in *Philosophische Hefte* 5 : 1936.

Stalnaker, R. 1984. *Inquiry*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Stich, P. S., and S. Laurence. 1994. 'Intentionality and naturalism.' In French 1994. 159-182.

Tugendhat, E. 1970. 'Phänomenologie und Sprachanalyse. 'In *Hermeneutik und Dialektik* II, hrsg. von R. R. Bubner, K. Cramer and R. Wiehl. Tübingen : Mohr. 3-24.

Tye, M. 1994. 'Naturalism and the problem of intentionality.' In French 1994. 122-142.

———. 1995. *Ten problems of consciousness : a representational theory of the phenomenal mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Warner, R., and T. Szubka, eds. 1994. *The mind-body problem : a guide to the current debate*. Oxford : Blackwell.
Wilkes, K. V. 1988. '—, yishi, duh, um and consciousness.' In *Consciousness in contemporary science*, edited by A. J. Marcel and E. Bisiach. Oxford ; New York : Clarendon Press. 16-41.
Wollheim, R. 1971. *Sigmund Freud*. New York : Viking Press.
竹尾治一郎、一九九一、「ブレンターノとマイノング」『現代哲学のバックボーン』（神野慧一郎編）、東京：勁草書房、三三—五五。
廣松渉ほか編、一九九八、『岩波哲学・思想事典』東京：岩波書店。
村田純一、一九九三、「現象学の成立——ブレンターノとフッサール」『現象学運動　岩波講座現代思想　六』（新田義弘編）、東京：岩波書店、三—四四。

（筆者　なかはた・まさし　京都大学大学院文学研究科助教授／西洋哲学史）

the undersides of the metropolis, cultivated an "unrespectable view of society" (P. L. Berger). In this way the Chicago school of sociology was connected to literature, in the broad sense encompassing journalism, especially the literature "after the genteel tradition" of Dreiser, Lewis and others. They were part of the same cultural current.

Park emphasized that sociology was a science, but at the same time he advocated that, in regards to the understanding of human nature, sociologists should learn from literature. To conclude this paper, I propose that the Chicago school be reevaluated from the perspective of Wolf Lepenies, who situates sociology between science and literature.

Intentionality in a Historical Perspective (Part I)

by

Masashi NAKAHATA

Associate Professor of Ancient Philosophy
Graduate School of Letters
Kyoto University

Part I of this article provides a brief review of the current debate over intentionality, with an eye to show how the issues of intentionality are rooted in Franz Brentano's philosophical psychology and his philosophical background.

In much of the recent literature on mind, the problem of intentionality is presented as a problem which must be faced by any philosopher who wants to hold that mental states are part of the natural world; Naturalist philosophers are required to explain intentionality in naturalistic terms.

It was the seminal work by R. Chisholm and W.V.Quine that led analytic philosophers to think of the problem of intentionality in this way. Chisholm introduced the concept of intentionality into the mainstream of Anglo-American philosophy. By recasting Brentano's idea of intentional inexistence, he gave it a form that is in tune with philosophical temper of analytic philosophy ; then argued against behaviorism by showing that it is not possible to give a behavioristic account of intentional states. This suggests that intentionality is an irreducible *sui generis* phenomenon. However, the irreducibility of the intentional can be taken to show, as Quine argued, the baselessness of intentional idioms. In response to this dilemma, a huge variety of approaches have been taken to explain intentionality,

such as neo-Cartesianism (Fodor), instrumentalism (Dennett), and neo-pragmatism (Rorty). My interest, however, is not in the current debate about the problem of intentionality generally, but in its historical roots. For I think that contemporary positions pertinent to the problem of intentionality descend historically from the complication of Brentano's philosophy, especially from his notion of intentional inexistence.

In the so-called intentionality-passage in *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Brentano seemed, as H. Spiegelberg points out, to give two distinct characterization of intentional inexistence: one in terms of the idea of 'inexistence' or 'immanence', the other in terms of the idea of 'reference to an object (or content)'. Chisholm, on the one hand, giving importance to the former characterization, holds that the notion of intentional inexistence implies the ontological thesis that there are intentional objects with a peculiar ontological status, intentional *inexistence*. McAlister, on the other hand, urges that even in the 'early days' Brentano did not commit to the ontological thesis. She takes intentional inexistence to be a unique relation to object. And Richardson verifies Brentano's denial of the thesis by turning to Brentano's study on Aristotle's *De anima*. Richardson rightly points out that the idea of intentional inexistence comes from Aristotle's theory of perception, in which the form of the perceived object is received without matter. Hence, he argues, intentional inexistence should be made out in terms of a mode of reception, not in terms of an ontologically unique type of object.

There is no doubt that Aristotle's philosophy is the most important source for Brentano's psychology. However Brentano not only associated the notion of intentional inexistence with the idea of Aristotelian immaterial reception, but also explicated it in Cartesian terms, such as 'immanent objectivity'; This suggests that Brentano found Aristotle's psychology compatible with Cartesian philosophy of mind. In Part II of this article (forthcoming) I will observe that the Cartesian conceptual framework biased Brentano's interpretation of Aristotelian psychology and show that there is tension between Aristotelian externalism and Cartesian internalism within the notion of intentional inexistence, which continues to lie at the base of the issues of intentionality.